

■ 学校の共通目標

授業作り	重点	・めあてを明確にし、児童が見通しをもてる授業展開を行う。 ・個に応じた支援を充実させ、基礎基本の定着に努める。	中間評価	・指導案を作成し、授業に臨む機会を意図的に取り入れることや、若手教員への指導に関わることで、教師自身が授業改善に取り組む意識が高まってきている。それにより、児童にとって分かりやすく、主体的に取り組みたくなるような授業展開を目指し、授業作りに取り組んでいる。子どもたちが自ら課題を見つけ、学習に取り組むことで、意欲的に学習に向かう姿が多く見られるようになってきた。	最終評価	
環境作り		・富久スタンダードをもとにした学習規律と教室環境の共通化。		・教室前方の掲示板にカーテンを取り付け、児童がより学習に集中できるよう環境整備を行った。毎月第1週目をあいさつ週間とし、自ら進んで挨拶できる姿を目指している。また、富久スタンダードと毎月の生活目標を照らし合わせ、生活の様子について振り返りを毎月行い、生活規律や学習規律の確実な定着を目指している。		

■ 学年の取組内容

学年	教科	学習状況の分析（10月）	課 題（10月）	改善のための取組（10月）	最終評価（2月）	
1	国語	学 およそ9割の児童が、平仮名を正しく書くことができる。 学 板書を正しくノートに書き写すことができるようになった。 学 主語・述語や助詞に気をつけて文章を書くことができるようになってきたが、まだ定着は不十分である。	・主語・述語や助詞に気をつけて簡単な文章を書く。 ・友達の発表を聞くときには、相手の目を見て話をよく聞くこと。	・「は・を・へ」の文型を使って文を作ることを繰り返し指導する。 ・友達の発表を聞いたり、自分の意見を発表したりする活動を設定する。		
	算数	学 和と差が10までの計算は、およそ9割の児童が定着している。	・繰り上がりのあるたしざんと繰り下がりのあるひきざんの定着	・具体物や半具体物を操作して問題解決に取り組む時間を多く設ける。 ・計算ドリルやプリント、ICT機器を使い、繰り返し問題に取り組ませ、定着を図る。		
学年	教科	学習状況の分析（4月）	課 題（4月）	改善のための取組（4月）	中間評価・追加する取組（10月）	最終評価（2月）
2	国語	学 ひらがな、カタカナ、漢字を適切に使って文を書けるようになった。 学 教科書の文章構成に気を付けながら、書きたいことを文章にする力がついてきている。 学 自分の気持ちを相手に伝えようとする活動は意欲的に行える。	・促音や長音表記の誤表記。 ・文章を話し言葉で書く。 あるいは、聞こえたままの音で言葉を書く。	・正しい言葉の表記を身に付けられるよう、ノート等のマスをICT機器を用いてホワイトボードに映し出し、全体に見える形で指導したり、個別にノート指導をしたりしていく。 ・作文などに取り組むときは、児童が意識して漢字を使用できるように既習の漢字をホワイトボードに提示する。また、間違えやすい言葉についても同様にする。	・促音・長音の誤表記、文章を話し言葉で書いたり聞こえたままの音で言葉を書いたりする課題についてはほとんどの児童は改善が見られている。引き続き ICT 機器の活用、個別のノート指導を行い、全員正しい表記ができるように指導を重ねる。また10月から作文ノートを週に1回程度使用し、考えたことを分かりやすく書いて表す学習をしている。	
	算数	学 たし算やひき算の学習内容について、概ね9割の児童が定着している。	・繰り上がりや繰り下がりのある計算を、教科書の問題だけでなく、演習プリント等で繰り返し取り組ませることで習熟を図る。 ・問題を解く際に、ペア学習やグループ学習で児童同士が対話を行う中で多用な考えを引き出し、自分の考えを説明することで、絵や図を効果的に用いられるようにしていく。	・基礎的な計算練習を、小テストなどを活用して繰り返し行う。 ・具体物の操作をして問題解決に取り組む時間を設け、自分の考えをまとめる習慣付けする。	・計算練習の指導を演習プリントや小テストを活用して行った。習熟度が高まり、テストではおおむね9割の正答率が見られた。九九の学習では家庭の協力を得ながらカードや反復練習を通して全ての児童が習得できるように指導を行う。 ・ペア学習やグループ学習を授業の中で積極的に取り入れることで多様な考えに触れ、思考に広がりが見られた。ICTを使用して考えたことを説明したり、具体物や図、言葉など様々な方法で表現したりする活動を行っている。	

3	国語	調「書くこと」で目標値を大きく上回っている。漢字についても、「漢字を読む」では100%、「漢字を書く」でも95%と目標値を上回っている。	- 文章の深い読み取りと概要の理解の定着を図る。 - 文章構成の理解と作文をする力の育成を図る。	- 作者の意図や作者が伝えようとしている事柄について、キーワードをもとに読み取るなど、具体的な読み取り方の方法を教える。 - 短作文の指導やワークシート、授業の振り返りなどで、日常的に書く活動を重ねる。	- 国語の物語の教材では、自分が考えたことや感じたことは文章のどの部分を根拠に考えたのかということを明らかにして話し合うことで、読みが深まり言葉に対する意識が高まった。そのことにより、文字を正しく読むことはもちろんだが、論理的な思考力も高まり、書くことへの意識も高まった。 - 日記指導や短作文の指導では、書く視点を丁寧に示すことで書くことへの意欲が高まり、国語の学習で学んだことをもとに、文章の構成についても考えられるようになった。 - 毎時間、振り返りを行い、書く活動を重ねることで、自分の思いや考えを的確に表すことができるようになった児童が増えた。	
	算数	調「数と計算」の領域では正答率92%と目標値を15%上回っている。一方で「量と測定」では目標値を上回っているが、78%とやや低い結果だった。	長さやかさの分野において、単位相互の関係の誤理解が多い。	数字と実際の長さ手で表したり歩いてみたりして、量感を日常的にあらゆる場面で学習と結び付けて育てていく。	- 長さの学習では自分で想定したテープの長さを実際に切って測ってみるなどして、自分自身の感覚と実際の長さのずれを感じることで、的確な長さの感覚を身に付けることができた。授業内で実際の長さと数値を結びつけて学習する時間を多くとることにより、長さに対するイメージが十分に育ち、数値を見て長さを想定することが容易になった。 - 重さの単位と量り方については、児童は自作の天秤を使うことで興味をもって意欲的に学習に取り組むことができ、習得も確実にできた児童が多く、テストの成果にも表れていた。この学習でも実際に予想を立てた後に、ものを持って重さを体感し、実際の重さを量ることで、数値と実際の物の重さを結びつけて考えることができるようになり、どの児童にも理解の定着が見られた。	
4	国語	調「読むこと」については、目標値を上回っている。「書くこと」や漢字の習得が目標値を下回っている。 学「書くこと」では、経験したことが伝わるように表現することに苦手意識のある児童がいる。	- 指定された長さで文章を書く力の育成を図る。 - 初め・中・終わりの文章構成で作文する力の育成を図る。 - 様子や気持ちが伝わるように文章を書く力の育成を図る。 - 既習漢字の定着の育成を図る。	- 日常的に文章を書く活動を多く取り入れ、様子や気持ちが伝わるように言葉を選んで書くことを意識させる。また、構成を考えて表現できるようにする。 - 読書を奨励し、読書を楽しむ中で様々な表現に触れられるようにする。 - 漢字の小テストを反復して行い、既習漢字の習得を確実にする。	- 構成を考えて文章を書くことを意識できるようになってきたが、言葉集めをする活動を行い、短作文の指導を続けて行っていく。 - 読書の習慣が付けられてきた。今後は並行読書やテーマ読書などを設定することにより、読書の幅を広げていく。 - ミニテストの反復や漢字検定への取組を通し、確実な漢字の習得ができるようになってきた。	
	算数	調「数と計算」では、乗法の問題は目標値を上回っているが、除法や繰り上がりありの加法の計算に課題がある。 学「図形」では、正確に作図することに課題がある。文章題では、活用問題の立式に戸惑ってしまう。	- 基礎的な計算力の定着を図る。 - 文章題の意味を捉え、問題の中から情報を選んで正確に立式する力の育成を図る。 - 道具を適切に使って正確に作図する力の育成を図る。	- 基礎的な計算練習を繰り返す行う。 - 文章題の題意を捉えて、図を描いたり、文章で説明したり、する経験を積ませる。 - 図形を組み合わせた模様を描く活動などに取り組ませ、道具を使って作図することに慣れさせる。	- 文章題の立式については、四則計算の意味について前学年までの復習をすることで少しずつできるようになってきている。理解を深めるために文章題をただ解くだけでなく、考え方を言葉で説明することを繰り返し指導していく。 - コンパス、分度器を使用する作図や三角定規を使用した垂直、平行の作図については、慣れるまで繰り返し反復練習が必要である。	
5	国語	調「書く能力」では、平均を上回っている。 学作文の中で、既習漢字を正しく使えない児童が6割いる。	- 既習漢字の確実な定着の育成を図る。 「話すこと・聞くこと」では、伝えたいことの要点を押さえて話す力の育成を図る。あるいは、大事なことを落とさずに聞く力の育成を図る。	- 日記や作文指導の中で、意図的に既習漢字を取り入れられるように教室掲示などを工夫する。 - 自分が思ったことを表現できる場を多く設定する。 「話し方名人」「聞き方名人」など、よい話し方、聞き方のモデルを掲示し、いつも気を付けながら学習できるようにする。	- 日記や作文の他にも学習感想や振り返りカードなど、書く活動を多く取り入れた。活動の中で既習漢字を使うことを繰り返し指導してきたことで、漢字辞典などを活用しながら進んで漢字を使おうとする態度が身に付いてきた。 - 学習の中で、考えを表現する場、対話をする場を必ず設定している。自分から話すことが苦手な児童には、話型を示したり、司会者が質問したりしながら、話す力、聞く力が積み重なってきている。 - 児童・生徒の学力向上を図るための調査では、全体的に都の平均は上回っていたものの、書く力は73.3%と十分ではない。普段の作文の中で主語述語のねじれや、話題のずれなどがあるため、読み手に伝わる文章が書けるように、日常的な書く活動の中で正しい文章の書き方に取り組んでいく。	

		調「数と計算」が確実に定着していない児童がいる。 「図形」では、正確に作図することに個別支援が必要な児童がいる。	四則計算の確実な定着を図る。 文章問題からの立式を正しく行う力の育成を図る。 正しいものさしの使い方やコンパスの操作など、道具を適切に使って作図する力の育成を図る。	基礎的な計算演習を繰り返す行う。 問題から具体物、作図、数直線などを用い、段階をおった指導を行う。 学習の中で繰り返し指導し、確実に身に付けられるように指導計画を立て、意図的に作図する時間を設ける。	既習事項の確認ができるような授業展開を工夫し、5年生までに学習したことを復習しながら、また活用しながら新しい学習に取り組んでいる。繰り返し確認していくことで、既習事項の確実な理解につながり、定着できることが増えた。一方で基本的な四則計算が曖昧な児童もあり、公倍数や公約数、分数のたし算・ひき算の学習に躓いている。引き続き基礎的な計算演習を繰り返し行っていく。 日頃のノート指導の中で正しい定規の使い方を指導し、丁寧に図を描くよう習慣付けている。また、文章問題を数直線や図を活用して考えてから立式することも習慣付け、確実に問題把握することを目指し取り組んでいる。その結果、正しく問題を捉え、解決できることが増えた。 児童・生徒の学力向上を図るための調査では、全体的に都の平均は上回っていたものの、表現力が53・8%と低い。学習問題に取り組む際に、図や式で表現したり、表現したことを説明したりすること、発表された多様な考えをもとに話し合うことを通して、論理的に表現する力を身に付けられるようにする。
6	国語	学既習の漢字を間違えて覚えている児童や、正しく書けていない児童が3割程度見られる。 学目的や根拠を明確にして書くことに課題がある児童が4割程度見られる。	語彙力の向上を図る。 言葉を吟味し、文章を推敲しながら、自分の考えや意見を書く力の育成を図る。	宿題で反復練習を行い、漢字の意味や成り立ちを辞書で調べるなど、語彙力を高める取り組みを行う。 学習だけでなく行事も含め、年間を通して自分の考えを書く機会を多く設け指導を行う。	様々な分野の本に興味をもち、進んで読み進める児童が増えてきた。家庭学習にも言語に関わる学習に取り組む児童が多く、語彙力も高まってきている。引き続き、毎週のテーマ作文等の書く活動を充実させる。 学習、生活目標、行事の振り返りで書く機会が多いことにも少しずつ慣れてきた。しかし、なかなか書き進められない児童や具体的な内容が書けない児童もいる。全国学力調査では「書くこと」の正答率が54%と都の平均をやや下回る結果だった。国語の「書くこと」の学習では、目的に合った視点や書き出し文、語彙に関する手引書等を与え、具体的にどんなことを書くかよいのか例文を提示しながら指導していく。
	算数	学「図形」では見取り図や展開図を描くことに課題のある児童や図形の性質を理解して合同な図形を描いたり作ったりすることに課題のある児童がいる。 学「数と計算」が確実に定着していない児童がいる。	定規、コンパス等を用いた正しい作図をする力の育成を図る。 小数のかけ算、わり算や分数のたし算、ひき算を正しく計算する力の育成を図る。	意図的に作図をする時間を設け、正確な作図について指導を行う。道具の使い方をもう一度確認し、正しく使って描けるように指導を徹底する。 ベーシックドリルなどを活用し、反復練習を行う。	「拡大図と縮図」では、辺の長さや角の大きさを正確に測り、コンパスや分度器を用いて丁寧に描ける児童が増えた。しかし1．5倍の拡大図や2分の1の縮図などの場合、正確な辺の長さが出せず、正しい図形を描くことができない児童もいた。よく問題を読み、正確に計算することを繰り返し指導していく。 全国学力調査では「量と測定」の正答率が56%と都の平均をやや下回る結果だった。今後は面積や体積、速さ等の公式を再度確認し、問題で何を問われているのかしっかりと読み取る力を付ける必要がある。そのために、2学期から取り組んでいる課題別学習プリントを活用し、児童の課題になる部分を明らかにしながら指導を進めていく。
音楽	学音楽を楽しめる児童が多いが、中には苦手意識をもつ児童もみられる 学「〇〇な様子を表すため、こんな風に演奏したい」という思いをもつことに課題がみられる。	リコーダーの運指、息遣いの定着を図る。 音楽の表現、鑑賞活動を通して、どんな気分になったか、なぜそう思うか言葉で表現できるようにする。	スモールステップで評価し、声をかけ、自信をもたせるようにする。 音楽の仕組みや音楽の様子を表す言葉等、言葉で表現できるよう掲示物を工夫する。	音楽会という大きな目標に向かい、音を合わせる喜びや心地よさを少しずつ体感できるよう、楽曲の一部分を取り出したり、少人数で演奏したりしながら授業を進めた。音楽会ではどの児童も達成感を味わうことができた。 それぞれの楽曲のよさや、どういうことを伝えたいか等、児童の言葉で共有する場を設ける。	
図工	学楽しんで制作に取り組む児童が多いが、中には自分の作品に自信が持てない児童もみられる。また、友達の作品のどの部分を自分が良いと感じているのか、伝えることにも課題がある。 学技能面で個別の支援が必要な児童がみられる。	自分や友だちの作品のどの部分を自分が良いと感じているのか、言葉で表現できるようにする。 用具の安全で正しい扱い方を繰り返し指導し、技能面での基礎的・基本的な力の育成を図る。	課題ごとに鑑賞の時間を設ける。多様な考え方を共有し、認め合うことで自己肯定感を高めることができるよう指導する。また、鑑賞の具体的な視点を伝え、どの部分を自分が良いと感じているのか、明確に説明できるよう指導する。 個別で声かけや、具体的な用具の使い方を支援する。	自分や友だちの作品の、色や形など造形的な視点に基づいた良さについて、少しずつ言葉で伝えることができるようになってきている。各学年鑑賞カードなどを用いながら、造形的な視点をより意識できるように、引き続き指導していく。 個別で声掛けや支援を行うとともに、ICTを活用し制作過程の模範を映しながら、用具や材料などの扱い方や注意等をより具体的に示す。	
特支	学一斉指示が通らない、個別での支援が必要な児童が多い。	教室内での特別な支援が必要。 個に応じた適切な支援ができれば、一斉指導も可能な場面が多い。	担任と特別支援教育コーディネーターや、特別支援教室専門員が日頃から児童の様子や対応について共通理解をする。	専門員、支援員、学びの担当、学級担任が児童について共通理解するための連絡ファイルを活用している。 学級と連携して指導にあたり、一斉指示を聞く前の声かけを統一し、授業の約束の掲示物を共有することで、話し方を聞くルールが少しずつ身に付いてきた。	

【調】…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況 【学】…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況 ※分量は2 ページ以上となってもよい。